

第28回卒後研修セミナー後記

インプラント治療のパラダイムシフト
～患者中心のインプラント治療を求めて～

18期 河野慶吾（学術部・副部長）

2020年2月16日に東京・渋谷区 日本薬学会 長井記念館にて林揚春先生をお招きし、*インプラント治療のパラダイムシフト*～患者中心のインプラント治療を求めて～を演題に120名以上が集まる中、ご講演をして頂きました。

林揚春先生は、2009年の奥羽大学歯学部同窓会会設30周年記念学術講演会の第2弾に続き、今回で2回目のご登壇となります。

午前での、ご講演は、歯槽提保存の1手方である、Root Membrane Technique（別名：Socket Shield Technique）の審美的領域に対して、診査・診断のお話を頂きました。抜歯即時埋入する際に、前歯部の歯間乳頭の確保するために、CTでインプラント埋入ポジションから、頬側骨・隣在歯までの距離、歯根の位置までの距離を測り、頬側に歯根を残す事で歯間乳頭を温存する為に必要な、歯根の分割の手順を細かく説明して頂きました。今迄は、GBR・結合組織などで、前歯部の審美回復をするのがスタードであったが、頬側骨をいかに失わせない治療法として、Root Membrane Techniqueが有効であることを多くの症例を用いて、ご講演されました。

午後は、垂直的に骨の無い臼歯部症例に対してのShort Implantを使用し、サイナスリフトや骨造成などをせずに、Counterclockwise drilling（逆回転形成）と言うドリリングテクニックを応用することで、埋入方向がぶれにくくなり正確なインプラント埋入窩の形成と、骨質改善を同時にを行うOsseodensificationコンセプトの考え方により上顎洞提挙上することができ、ConvergentタイプとDivergentタイプの特徴を理解してフィックスチャーを選択することにより、患者様に対し外科低侵襲・治療回数・来院日数を少なくできる事を、症例を交えて報告して頂きました。

すべての歯科治療にも言えることだが、診査・診断の大切さが、“患者中心のインプラント治療”になることを再確認し、2020年オリンピックイヤーにふさわしい最初のセミナーを受講することができました。

次回の開催は、7月12日（日）奥羽大学にて、若林健史先生 11月8日（日）渋谷・長井記念館にて、青島徹児先生がご登壇されます。学術部一同、今後も著名な講師をお呼びして、多くの同窓生が参加して頂けるセミナーを開催していきたいと思っております。